

当院における有病児への口腔ケアについて



九州大学病院医療技術部歯科衛生室

小児歯科・スペシャルニーズ歯科

山下 薫 (やました かおる)

2009年 広島大学歯学部口腔保健学科口腔保健衛生学専攻 卒業

2011年 広島大学大学院医歯薬学総合研究科口腔健康科学専攻
修士課程 修了

2011年 九州大学病院医療技術部歯科衛生室
小児歯科・スペシャルニーズ歯科配属

当科は「親子とともに病と闘い、親子を支援する」をモットーとし、平成18年3月に開設された小児医療センターの一部門として小児科、小児外科、周産期医療・新生児医療、子どものこころの診療部と連携し、様々な有病児の歯科治療、口腔衛生管理を行っています。平成25年2月に本院が九州・沖縄ブロックのがん拠点病院に指定されたことにより、白血病をはじめとして多くの小児がん患児に対する治療体制が整えられました。それに伴い、抗がん治療前の口腔内感染源の除去及び周術期管理を目的に当科への紹介数も年々、増加しています。このような環境の中で、歯科衛生士として、化学療法や放射線療法、骨髄移植前に、安全で効果的な口腔ケアを行うとともに、患児、保護者、病棟看護師に対して口腔衛生管理の重要性を理解していただけるよう心掛けています。

小児病棟では、全身疾患やその治療の副作用による口腔粘膜障害が原因で、口腔内の疼痛、会話の減少、食事の経口摂取や服薬の困難など、口腔機能に関連した様々なトラブルが生じます。重症な口腔粘膜障害を抱えた患児に対しては直接病室へ赴き、疼痛緩和を目的とした口腔ケアを行っています。中には、歯科医師、歯科衛生士に対しては嫌がることなく口腔内を見せてくれたり、「バナナのジェルでピカピカにしてみよう！」と口腔ケアを楽しみしてくれている患児もいます。保護者のみならず、小児科担当医師や看護師からも口腔ケアの相談や依頼がしだいに増加しています。小児病棟において、過酷な病と闘っている患児に対し、歯科衛生士の役割は今後、ますます重要になっていくであろうと考えます。

その他、終末期を迎えた患児に対して緩和ケアを目的とした口腔ケア依頼も増えています。終末期においては、患児やご家族のご希望に沿って、口腔内の不快症状を少しでも和らげることができるように心掛けています。時に、そう遠くない死を受け入れつつあるご家族が、患児に何をしてあげられるかを一緒に考えることも、歯科衛生士にとって大切な仕事ではないかと考えさせられることもあります。

このような有病児に対して安全で効果的な口腔ケアを行うためには、患児ひとりひとりの全身状態や病状を把握することが極めて重要です。診療前に患児の病名、治療経過、服薬状況や各種検査データ、小児科主治医からの情報の確認、そして日常生活での様子や診療当日の体調確認など、患児や保護者からの問診もしっかりと行うよう心掛けています。点滴や酸素投与中で、生体監視モニターが必要な患児に対しては、当科の歯科医師だけでなく看護師とも協力し、口腔内からの感染や出血に留意しながら口腔ケアを行っています。

このように、歯科衛生士として当科で様々な有病児の口腔衛生管理を任されるようになり、一般的な歯科医学的知識・技術に加え、全身状態・病状を把握する上で基本的な医科学的知識が不可欠であることや、ひとりひとり全く異なる全身状態・病状を正しく把握した上で、安全で適切な口腔ケアの方法や材料、道具を選択しなければならないことなど、日々の診療で患児たちから学ぶことがたくさんあります。

今回のシンポジウムでは、当科で取り組んでいる有病児に対する口腔ケアについて、症例を交えてご報告させていただくとともに、ご意見やアドバイスを頂きたいと思っております。